

2024年3月10日（日）主日朝礼拝説教

『三本の十字架』井上隆晶牧師  
イザヤ 53 章 1～5 節、ルカ福音書 23 章 32～43 節

### ①【苦しみの意味】

イエス様は最も重い刑である十字架刑を宣告され、処刑されるためにゴルゴタ（髑髏）の丘に引かれて行きました。主は自分がつけられる重い十字架の木を自ら背負い、刑場まで歩かされました。刑場で両手首と両足を釘づけられて、十字架の木が立てられました。十字架刑はすぐには死ねず、死ぬまで何日も苦しみ、最後は窒息死か、心臓破裂で死ぬそうです。イエス様は後者でした。兵士たちはくじを引いてイエス様の服を分け合い、彼からすべてを奪いました。議員たちはあざ笑ひ「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで選ばれた者なら、自分を救うがよい。」(35 節)といい、兵士たちも「お前がユダヤ人の王なら、自分を救って見ろ。」(37 節)といい、強盗も「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」(39 節)と罵りました。この言葉には期待と、それを裏切られた怒りがまじっています。しかしイエス様は十字架から降りません。イエス様はあらゆる苦しみを自ら受け入れました。古代の祈祷文はこう書いています。

●「大地を水の上に懸けられた者は、今日十字架の木に懸かり、天使たちの王は茨の冠をかぶせられ、雲をもって天を覆った者は、偽の紫の衣を着せられ、ヨルダン川でアダムを自由にした者は、頬を打たれることにまかせ、教会の花婿は釘をもって釘づけられ、処女の子は槍をもって刺されました。キリストよ、われらはあなたの苦しみにひれ伏します。」

使徒信条は「ポンティオ・ピラトのもとに苦しみを受け」とあり「苦しむ」という言葉を入れています。ユダヤ人たちは苦しみが無くなるのが救いだと思い、この世のカルト宗教はそろって苦しみからの解放を約束します。しかしキリスト教は苦しみからの解放を約束しません。「あなたがたには世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」(ヨハネ 16 : 33) と主は言われました。苦しみは本来、神様がお造りになった世界にあってはならないものでした。しかし人間の墮落と共に苦しみは入ってきました。苦しみはこの世では無くなりません。墮落したこの世界では不可能です。そこで神様は人間を奇跡や力によって救うのではなく、苦しみを連帯するという方法で人を救おうとされたのです。つまりキリスト神自らが「人間の苦しみ」を体験することによって、苦しみの意味を変え、それを救いの道具とされたのです。

●神谷美恵子という精神科の女医さんがいました。彼女がハンセン氏病の療養所に行き、診察台の上に置かれた患者を診た時、ショックを受け、詩を書きました。「私はあなたの前にこうべをたれる。…なぜ私たちでなくてあなたが？あなたは代わって下さったのだ。代わって人としてあらゆるものを奪われ、地獄の責苦を

悩みぬいて下さったのだ。ゆるして下さい。…」

彼女は患者さんの苦しむ姿を見た時、自分に代って苦しんでいるのだと感じたと言うのです。人類を一つの体、一つの家族として見なければなりません。家族でもそうです。一人が精神病になると、周りの四人がうつ病になります。必ず影響し合うのです。世界を見るとウクライナ人、パレスチナ人、ロヒンギャ族、ミャンマー、クルド人その他の多くの民族が、今も戦争や迫害で苦しんでいます。もしあなたがその民に生まれていたらどうですか？なぜ、あなたではなく彼らなのですか？彼らは私の代わりに苦しんでいるのだとしたらどうですか！苦しむ人を見る時、私たちは自分の罪に気がつくのです。苦しみは神秘です。この人類の中に神の子キリストが入り、人の罪と苦しみと死を連帯されたのです。今でも誰かが苦しむとき、キリストも一緒に苦しんでくださっています。この方にすべての人の罪は負わされ、人に赦しが与えられたのです。

## ②【右と左の強盗の運命は分かれてしまった。愛に気づくかどうか。】

ゴルゴダの丘には、イエス様を中心にして二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に十字架につけられました。その時イエス様は父なる神に祈りました。「父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのか知らないのです。」(24節)キリストが人間の苦しみを共に負い、共に苦しんでおられる姿を見て右の強盗は変わりました。「お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は自分のやったことの報いをうけているのだから当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」(40～41節)人間は自分の罪で苦しみます。自業自得です。でもキリストはそうではありません。苦しみに与らない方が苦しんでいます。しかも自分を苦しめる人の罪を赦しておられるのです。ここに神の愛が完全に現れました。この愛に強盗は気づいたのです。そしてこう祈りました。「イエスよ、あなたの御国においてになるときは、私を思い出して下さい」(41～42節)。その時、イエス様は強盗に「はっきり言うておくれ、あなたは今日わたしと一緒に楽園(天国)にいる」(43節)といわれました。

●昔の祈禱文にはこう書かれています。「あなたの十字架は二人の盗賊の間にあつて義の秤となりました。一人はそしりの罪の重さによって地獄に落とされ、一人は罪から解かれ、軽く上げられて、キリスト神よ、光栄があなたにありますようにと讃めあげてを悟りました。」

全ての人が苦しみます。でもその苦しみの中で人は分かれるのです。一方は自分の罪を知り、それでも愛して下さる神の愛を知ります。もう一方は、同じ苦しみを受けても、神と人の愛を信じられず、苦しみを神と人のせいにして、恨みの中に閉じこもるのです。人は自分で天国に入り、自分で地獄にとどまるのです。神が人を地獄に落とすものではありません。地獄でもその人に対する神の愛は変わらないからです。ただ地獄にいる人はその愛を信じようとしないのです。

### ③【神の愛の勝利】

悪の力はイエス様を苦しめましたが、それでもこの方を倒すことはできませんでした。何をしてもイエス様の人間への憐れみを憎しみに変えることは出来なかったのです。神は愛だからです。神は神であり続け、愛そのものであり続けました。

「光は闇の中に輝いている。闇はこれに勝たなかった。」(ヨハネ1:5) のです。

●第二次世界大戦の時、アウシュビッツ収容所でポーランド人のコルベ神父が、ある一人の収容者の身代わりになって亡くなりました。彼は自分を殺そうとする兵士をも赦して亡くなりました。そのことを伝え聞いた多くの収容者たちに変化が起きました。一日の重労働を終えた点呼の時に、真っ赤に沈んでゆく夕日を見て彼らは「ああ、なんてこの世界は美しいんだ…」と言ったということです。それはどんな過酷な状況の中でも、人は人らしく生きることが出来るということを知ったからです。収容者たちは人間の尊厳を取り戻しました。まさに死と悪の敗北です。

多くの群衆も、祭司長も、十字架の強盗も、強さが自分を救うと思っていました。だからメシアに強さを求めました。しかしメシアは弱くなって人を救いました。強さではなく弱さが人を救うのです。今でも世界中の多くの人が強く、豊かであれば救われると思っていますが、金持ちは天国に入るのが難しいのです。貧しくなければ救われません。聖書が繰り返し語るのは、強さではなく弱さが、大きい者ではなく小さい者が、豊かさではなく貧しさが人を救うということです。力は人を滅ぼします。「馬は勝利をもたらすものとはならず、兵の数によって救われるのでもない。見よ、主は御目を注がれる。主を畏れる人、主の慈しみを待ち望む人に。」(詩編33:17) 聖餐の時、一番神を感じるのは障がい児です。彼らは神の助けなしに一日たりとも生きられません。その次が子供です。子供も同じです。私達も幼子の様に無力にならなければなりません。キリスト抜きでは何もできないと思う事です。小さく、貧しく、弱い人は、神の助けがないと生きれないのです。それだけ神に近く、救いはとどまります。十字架の上の強盗は、何も出来なくなりました。彼は弱くなったので、キリストを信じ、キリストに頼ったのです。その時、彼は地獄から天国に入り、死の中に命が始まったのです。神が聖パウロに言ったように「力(神の)は弱さの中でこそ十分に発揮される」(Ⅱコリント12:9) のです。私達はキリストを誇りましょう。こんな貧しく、罪深い私達を愛して下さる主に栄光を献げたいと思います。